

## 9月定例活動「道普請施工報告」

大館 学

9月25日(土)、本来なら秋本番といったこの時期にしては不釣合いなほど蒸し暑い一日に、参加会員一同の汗と気力で、散策路の改修工事がめでたく竣工しましたので報告いたします。

当日集まった男女10数名、土木工事になぞらえて「オアシス土建」ご一行とでもしておきましょうか。森くらぶの小屋の近くから双子池の駐車場までの尾根越えの散策路の補修が本日の施工現場です。用意した資材は、メープルの角材と天白土木からいただいた長さ1.5mの木杭15本ほど。

登り口から作業にかかったものの、木杭を半分に切断し先を尖らせたり、

スコップとつるはしで土を掘りメープルの角材を据え付けその横に杭をカケヤで打ち込んだりといった過激な労働環境で、1時間もたないうちに全員あごがあがりかけ、小休止。それでも何とか、昼になったころには入り口から十数段の階段が整いかなりの施工量を確保できました。

階段は水準器を使ってレベルを出し、杭も硬い砂利混じりの地盤に50cm以上打ち込む本格的なもので、これなら10年くらい大丈夫なできばえです。

工事を完了してオアシス土建の施工管理の能力は非常に高いことと、これだけの難工事を誰一人怪我することな

く施工できたことで安全管理もばっちりということが証明されました。後は発注者である公園の利用者に有効に使ってもらうことが大切で、そのためにもこの道に人を誘いこむ道案内の看板が必要でないかと思いました。



## 特別活動「巣箱の点検&amp;掛け替え」

伊藤 晶子

11月14日曇り、朝9時に集合。まず古澤講師から、オアシスの森の鳥の生息状況をお話していただく。ここ数年の間に確認されたのは86種で、10月の調査では一日でその内の21種を観察された、とのこと。この森は鳥にもオアシスになっています。

8月の定例活動で行った巣箱づくりで特別参加されたコイズミ産業から6名の方も加わって、各自が数個の巣箱を持って出発。

以前掛けておいた巣箱を長い竹竿の先に引っかけて降ろします。箱を開ける瞬間がワクワクドキドキです。最初

の箱は直径3センチの入り口がすり減って、少し小さくなっていました。中にはミズグケがびっしりと敷き詰められ、真ん中は見事な丸いくぼみができ、羽毛も残っていました。幸せなシジウカウカの家族(?)に利用されています。

古い巣箱は修理のために持ち帰り、新しい巣箱を掛けました。このように次々点検していくと、以前掛けておいた9個の内、6個はシジウカウカに利用され、ほかは冬眠中のアシナガバチ、ドロバチ、スズメバチ、ヤモリに利用されていました。利用率の高さに気を

よくして、今年は17個を掛けました。

私たちが楽しそうに点検しているので、散歩中の家族2組も加わって、森の中を賑やかに行進です。巣箱が降ろされると、子どもたちは我先にと覗き込み、ヤモリを見て、家で飼いたいと親に交渉している子もいました。高い枝に巣箱を掛けるのは結構難しく、二度三度と失敗した後成功すると大拍手です。

来年は是非皆さんも参加して下さい。



## シリーズ『炭焼きの話』(第4話)

村田 英二

私は名古屋市内の町中に生まれ育ちました。里山保全活動に参加する以前は、ほとんど自然と係わらな暮らしでした。そして今、私はオアシスの森くらぶの活動を通じて身近な自然のすばらしさを自覚しています。

都会暮らしの人は「消費者」と呼びかえても良いかもしれません。

消費者は自然も直接関係をもたないし、命の糧となる食べ物さえも「商品」です。商品である以上、平気で捨てられても仕方ない訳です。でも本当にそれでいいのでしょうか。

私は「消費者」ではなく「生活者」になりたいと思っています。

生活者は降り注ぐ太陽に感謝して命の大切さを知る人、自然の中で生かされて

いる自分を自覚する人です。自然の恵に感謝できる人は決して食べ物を粗末にはできません。

こういうことを学校でいくら教えても、残念ながら体験を伴わない知識は決して身につけません。

現代社会において自然を身近に感じられる生活を体験することは難しいですが、ほんの少しでもそういう体験ができるフィールドがあればとても有意義なことだと思います。

私は都市における市民里山保全活動の意味はこの点にあると考えます。

山の恵を生かした暮らしは、私たちの先祖が営々と営んできた生活そのものです。いま市民が先祖の生活の一部を体験出来るのです。

山の恵のなかでも炭はとりわけ利用価値が高いものです。近年日本人は直火文化を消滅させつつあるそうですが、私自身は森の仲間と炭火を囲んで暖をとったり、炭を使って料理しているときに本当に心地よく感じます。

こころの豊かさを得るためには、こういう体験が不可欠だと考えてます。

里山保全活動は私にいろいろなことを教えてくれました。

これからも炭作りを通じて生活者の一端を体験していきたいと考えています。出来れば仲間の輪が広がることを願っています。

今回で炭焼きの話は終わりです。ご愛読ありがとうございました。